

自己を形成するには

丸山 郁太郎*

講演前、打ち合わせに来られた先生は少々緊張していたのだろうか、言葉もそれほど多くはなく、依頼されたのでわざわざやって来たという感じを受けた。しかし講演が始まるとその印象は覆される。生き生きとした甲高い声が部屋中に響き渡り、総勢約100名の学生を中心とした聴衆は見る間に先生の巧みな話術に惹きつけられていった。熱弁いや熱演といってもいいだろうか。この講演は学生諸君のみならず我々教職員への「学ぶ」ということへのメッセージであったように思える。

この「ムカツク・キレると『スラムダンク』な上達論」という一見不可解な講演名は、当初「スラムダンク」という語句は入っていなかった。どうやら学生を集めるには、某週刊漫画雑誌に掲載されていた人気漫画の「スラムダンク」をいれたほうが良いと判断したらしい。そして配布された資料の中にはこの漫画以外にも「あしたのジョー」等の我々にも馴染み深い作品のコマ割されたものを適宜活用した。それが功を奏したのか、なかなかの盛況であった。

内容は先生が以前より提唱している「ムカツク・キレる」論というよりも、その論を踏まえての一・二年生を中心とした学生諸君の図書館を活用した「大学での学び方」であったいえよう。難解な専門語句を並べた講演というよりも、学生と同じ目の高さで語るいわば訓話といった感じであった。教職課程の教員だからといってしまえばそれまでだが、学生心理をう

*まるやま・いくたろう / 整理課

まく汲み取り、聴衆を惹きつける「技」を持っている。そしてこの「技」という言葉が講演内容のキーワードとなっていくのである。

講演内容を僭越ながら私なりに要約してみた。簡単に紹介すると、本を硬い食べ物に例えるならば、それを噛み砕く硬い顎が必要となってくる。すなわち一・二年生は今がこの強い顎を鍛える時期である。例えばドラッグラーの話をしていても、まったくわからないのではしょうがない。ドラッグラーの話についていくには、ドラッグラーの著作物や研究本を読んで理解する必要がある。この鍛錬を積み重ねることによって硬い食べ物を噛み砕く力が養える。

しかしこれからの教育は「ゆとりある教育」を掲げており、鍛錬するということが欠けしまっている。人が「ムカツク」という状態は、「かったるい」という感情であり、すなわちエネルギーが滞留している状態である。そのエネルギーを発散させるには渾身の力を振り絞って何かに取り組みということである。最近の若者は渾身の力を振り絞らないうちに終えてしまう。力を出し切って課題に取り組み、やりきってしまう。そこから次のものを見出すという姿勢が大事である。そこで鍛えることによって「技」を身につけることが必要である。そこにはロマン・ロランやジャンクリストフが記した小説のようなビルディングス・ロマン、すなわち自己形成小説を頭に描くことが必要である。例えば、自分が“天才になる”と目標を持ったとしたら、どのようにしたら天才になれるかというを考え、そしてそのIdentityと「技」を結びつけて行かなければならない。その鍛錬はいささか苦しいものであるが、その苦しさに耐え忍ぶと体が慣れてくる。その忍耐による産物が「技」となり、自分の得意なもの・特技になる。また誰が自分を目標として生きるのかも意識する必要がある。今からでも遅くはない。渾身の力を込めて、自分の目標に取り組み、「技」を修得することによって生きるスタイルを確立することができる¹。

講演が終了すると同時に、私は目からうろこが落ちた。自分に欠落しているところをズバッと見透かされたような恥ずかしい気持ちと、これからやらなければならないことは何かということを示してくれて自分を奮立たせてくれた。そして自分自身もふくまれるであろう今の若者の「ムカ

¹ 「ムカツク」構造 / 齋藤孝著 世織書房刊（前頁写真参照）

ツク」感情をどのように発散させていかなければならないか、ということ
を論理的に説いてくれた。おそらく先生は、この講演で自分自身が「学ぶ」
にあたり、自己啓発してくれるきっかけの一助となることも期待していた
のだろうと思う。

また先生は「背骨をしゃんとしなければならぬ、つまり背骨をしゃんと
伸ばすことによって体の中心軸を保ち、深く呼吸することが可能になる。
その結果集中力を高め、物事に真剣に取り組むことができる」と身体的な
角度から論じている部分があった。

他方、精神的な角度から論じたものが天声人語にあったので一部分を取り
上げると、「茨木のり子さんが七年ぶりに出した詩集『倚（よ）りかから
ず』（筑摩書房）である。」「もはや／できあいの思想には寄りかかりたく
ない／もはや／できあいの宗教には寄りかかりたくない／もはや／でき
あいの学問には寄りかかりたくない／もはや／いかなる権威にも寄りかか
りたくはない／ながく生きて／心底学んだのはそれぐらい／じぶんの耳
目／じぶんの二本足のみで立っていて／なに不都合のことやある／寄りか
かるとすれば／それは／椅子（いす）の背もたれだけ。」「精神の背骨が、
ぴんと伸びている。日本語が、みごとに結晶化している。」「茨木さんは、
いま七十三歳。自分がかりにそこまで生きられたとして、”寄りかからな
い”ことを心底学べるだろうか。”なに不都合のことやある”と言い切れる
か。”できあいの”思想や宗教や学問の背もたれに、相変わらず寄りかかっ
ているのではなからうか。どうしても、そんな思いにさせられる²」。

さらに私の尊敬する故石橋湛山氏³は言う。「私がいまの政治家をみて一
番痛感するのは、『自分』が欠けているという点である。『自分』とはみず
からの信念だ。自分の信ずるところに従って行動するという大事な点を忘
れ」ている。「だいじなことは、まず自分に忠実であること⁴」だと。政治
家のありかたとして書かれたものだが、これを大学生または社会人と置き
換えても充分通用するだろう。

自分の確固たる信念や思想が確立されていないがために、既成されたも
のに心の拠り所を感じ、カルト宗教などに頼る者もいる。他のものにとら

²朝日新聞 10月16日「天声人語」

³第55代内閣総理大臣。元東洋経済新報社主幹・ジャーナリスト

⁴政治的良心に従います / 江宮隆之著 河出書房新社刊

われず自分なりに鍛錬して少しでもいいから「技」を身につける。そこから自分自身の信念・思想が構築され、バックボーンとなす。それが『自分』・『自己』ではないだろうか。

そして講演の中で先生は、『図書館はその「技」を磨くための知の宝庫である。』と述べた。図書館には必ず手に入れたいものが見つかるはずである。学生諸君のみならず教職員の皆さんのなかで自己を見出すことができないでいたら、図書館に来て少しでも興味のある分野の本を手にとって一冊読破して欲しい。図書館は自己形成のお手伝いができるはずです。